

NIU 異文化理解研究室の活動とコアメンバーの役割

中野はるみ

目次

はじめに

I これまでの活動とその分析

I-1 留学生と活動内容

I-2 実施活動内容とガイドノートの活動内容

II これからのコアメンバーの役割

おわりに

はじめに

地球規模での交流がさらに加速することが予想される 21 世紀に入ってから早いものであつという間に 2012 年に突入している。本学は 2000 年に開学した大学である。ミレニアムの年に産声を上げ、前世紀までに人類が犯したさまざまな諸問題を克服し、自由と平和を謳歌するための方途をさぐる研究と教育を進めてきている。とくに、グローバルな考察が必ずや望まれる中であって、国際交流の諸問題は避けては通れない課題となっている。

海外からの留学生を受け入れる方針の国際観光学科は、佐世保の地で快適で円滑な留学生生活を保障する役目を持っている。大学を取り巻く周辺地域の方々にも「何か違う」文化を楽しんで受け入れてほしいと願い、国際観光学科の共同研究として、「佐世保地域の異文化理解教育を支援するプログラムの開発」が、平成 15 年（2003）に立ち上げられた。そして、平成 17 年（2005）に長崎県教育委員会と佐世保市教育委員会の後援をいただいて、NIU 異文化理解研究室¹⁾が設立され、次ページの表のとおり、佐世保周辺地域の小中高等学校へ出前授業に出かける回数が大幅に伸びることになった。NIU 異文化理解研究室の活動は具体的には、本学の留学生と大学と取り巻く周辺地域の小中学校の子ども達との交流の機会を作り、留学生は各々の持っている自文化を教え、小中学校の子ども達にとっては異文化受容の機会とする活動である。

本論稿は、3 期 9 年の活動を終えるにあたり、これまでの留学生の活動を見据え、これからの活動をさらに有意なものとするため、留学生の活動を支えるサポーターとして、本研究室のコアメンバーである者が何をどのようにサポートしていくかを考察するものである。

I これまでの活動とその分析

自文化を紹介するという試みは、基本的に自文化を誇るものである。それが、排他的で

偏狭な民族的アイデンティティの形成につながるのであれば、逆効果となってしまう。常に活動をより開かれたものとし、より広い共通のアイデンティティの醸成まで含んだ活動にしておく必要がある。

そのような活動とは、お決まりのプログラムに沿った自文化の紹介のみではない。「ああ、面白かった」「ああ、不思議だった」だけのものではなく、なんらかの議論が始まる自文化紹介プログラムが異文化理解教育であろう。ここでいう議論とは、それぞれのレベルにあった質問と回答というものではなく、国立民族学博物館の吉田憲司が、ダンカン・キャメロンの主張を引き、「ミュージアム」の場を「テンプル」から「フォーラム」へと主張している「議論の場」である²⁾。それは、価値の定まった異文化を「至宝」のように有難がるものではなく、異文化理解教室の場が、異文化に触れたところから、「フォーラム」として、議論が始まっていく場所になることを意味する。NIU 異文化理解教室をそのような「場」にするために、コアメンバーはどのように留学生の活動に関わればいいのか、これまでの活動を振り返り、徐々に、異文化交流の面白さや諸問題が浮き出るようなダイナミックな活動へ移行させたい。

おおざっぱではあるが、これまでの活動内容を量的に表に表すと表1のようになる。実質的な活動実態と活動内容数、NIU 異文化理解教室の開催数は一致していない。それは、下記の2つのプログラムを教室開催数にはカウントしてあるからである。また、日本の伝統文化の代表であり本学の特色である「茶道」を日本語学校などに出前した活動についてはカウントしていない。また、1回の教室に複数の留学生が出前授業に行き、複数の教室で異文化理解教室を開催したこともあり、内容と回数は一貫していない。

- ①日本の小学生が日本文化や諸外国事情を調べ発表し、それらを留学生に聞かせ質疑を行うほか、日本の伝統的遊びを一緒に行うなどのプログラム。これは、出前先の小学生の学びのプログラムであるが、双方向の異文化交流になるプログラムで、留学生にとっても非常にいい学びの機会になっている。
- ②留学生の日本に対する意見等、談話形式のもの

I-1 留学生と活動内容

表1aと表1bからわかるように、留学生の出身地域³⁾は「中国」「香港」「台湾」「韓国」「ベトナム」「スリランカ」「モンゴル」などである。異文化理解教室は、留学生が背負ってきた、日本人にとっての「異文化」を紹介するプログラム中心とした活動内容になっていることから、出身者が卒業すれば、その活動内容は当然ながら開催されていないことが、表2との比較によって明らかである。それは、「スリランカ」「モンゴル」は、平成17年から平成20年まで、「ベトナム」は、平成18年～平成20年までに活動しているからである。

平成15年・16年の2年間は韓国からの留学生に中学校へ出前してもらった。その後、中国・韓国・香港からの留学生が途切れることなく本学に入学していることから、平成17年

表 1a 留学生の出身地域ごとのこれまでの NIU 異文化理解教室の活動内容一覧
(平成 15～19 年度)

異文化理解教室		第 1 期(15～17 年度)					第 2 期(18 年～					
		15 年度	16 年度	17 年度			18 年度				19 年度	
留学生の 出身地域	活動内容	中学	中学	小学	中学	高校	小学	中学	高校	一般	小学	高校
		中国	食	(水)餃子 団子作り					1	1		
目隠しでお絵描き												
遊び	老鷹捉小鶏・鷹				1							
	中国の遊び										2	
	正月飾り作り				1				1	1	2	1
	ジェンズ							1				
	中国将棋									1		
	凧上げ(連凧)											1
	中国の歌											
演技	少林寺拳法				1	2						
	太極拳											
	中国の踊り							1				
衣	変面											
	民族衣装					1					1	1
言語	中国語					2	1	1	1	1	1	
	漢字											
解説	地域紹介 (故郷・観光地)						1	2	1			1
	中国の食文化				1	2		1				1
	中国のマナー						1					
	中国文化の クイズと解説									1		
	日中文化比較											
	伝統行事 (新年)			1			1					
	伝統行事 (月見)											
	伝統行事 (七夕)										1	
	中国の国花					1						
	多民族の話			1		2						
	学校のシステム			1								
	日本のアニメ 中国語版											
	中国のスポーツ											

香港	実技	遊び 言語	香港の遊び						1				1		
			広東語								1				
	解説	日本に対する イメージ 香港人の 生活スタイル								2		2		1	1
日本で 驚いたこと 観光地紹介										1					
台湾	解説		台湾文化(生活 スタイル)								1				
韓国	実技	食	食事のマナー	1											
			伝統行事・遊び	1											
			スムゴゲ												
		遊び	ダンス												
			チェギチャギ		1						1				1
			ダクサウム		1						1				
	衣 言語 マナー	ユツリ				1									
		アギサバン													
		ビー玉遊び													
		民族衣装	1		1	1								1	
	競技	韓国語	韓国語												1
			クンジョル	1		1									1
		福袋作り シムル	福袋作り				1								
シムル															
韓流															
韓国料理										2					
教育システム															
解説	日本の漫画 韓国版	1													
	韓国事情 (クイズ等)		1										1		
ベトナム	実技	衣	民族衣装									1		1	
			ベトナムの生活 スタイル										1		1
スリランカ	実技	食 言語	スリランカカレー						1						
			シンハリ語								1		1		1
	解説		スリランカ紹介										1		1
モンゴル	実技	食	羊肉うどん						1						
			スーテチェ (ミルクティ)										1		
		衣	民族衣装									1	1		
	言語	モンゴル語 (キリル文字)										1	1		
		解説		モンゴル文化ク イズと解説							1		1		
ミャンマー	解説		ミャンマー事情												
異文化理解教室開催数				1	1	7	3	4	10	3	4	1	9	2	

表 1b 留学生の出身地域ごとのこれまでの NIU 異文化理解教室の活動内容一覧
(平成 20～23 年度)

留学生の 出身地域	解教室 活動内容		～20 年度)			第 3 期(21～23 年度)				9年 合計	高 数 値				
			20 年度			21 年度		22 年度				23 年度			
			小学	高校	一般	小学	高校	小学	高校			小学	高校		
中国	実技 52	食	(水)餃子 団子作り	3	1		1	1			2		10	◎	
		遊び	目隠しでお絵描き						1					1	
			老鷹捉小鶏・鷹									1		2	
			中国の遊び									1		1	
			正月飾り作り	1										7	◎
			ジエンス	1										2	
			中国将棋											1	
			凧上げ(連凧)									1		1	
		中国の歌		1						1			2		
		演技	少林寺拳法 太極拳	1	1					1	2		1	9	◎
			中国の踊り							1				2	
			変面										1	1	
	衣	民族衣装		1									4		
	言語	中国語	1	1									9	◎	
	解説 40	漢字						1					1		
		地域紹介 (故郷・観光地)	1					1	1		1		9	◎	
		中国食文化	2				2				1		10	◎	
		中国のマナー	1										2		
		中国文化クイズ と解説											1		
		日中文化比較	1	1					1				3		
伝統行事 (新年)						1	2			1		6	○		
伝統行事 (月見)									1			1			
伝統行事 (七夕)												1			
中国の国花												1			
多民族の話												3			
学校のシステム												1			
日本のアニメ 中国語版	1										1				
中国のスポーツ	1										1				

香港	実技 3	遊び	香港の遊び									2		
		言語	広東語										1	
		解説 21	日本に対する イメージ				1	1					2	
	香港人の 生活スタイル		4	2		2		1				15	◎	
				日本で 驚いたこと					1			1		
			観光地紹介			2			1		3			
台湾	解説 1		台湾文化(生活 スタイル)								1			
韓国	実技 39	食	食事のマナー									1		
			伝統行事・遊び				1					2		
			スムゴゲ					1				1		
		遊び	ダンス						2			2		
			チェギチャギ					1				4		
			ダクサウム	1							1	4		
			ユッソリ	1								2		
		衣	アギサバン								1	1		
			ビー玉遊び								1	1		
	民族衣装		1	2	1		2	1			11	◎		
	韓国語・ハング ル							1		1	2			
	マナー	クンジョル	1				2			6	○			
	競技	福袋作り								1				
		シムル	1							1				
	解説 17	韓流		1		2	2				5	○		
		韓国料理	1			1					4			
		教育システム	1								1			
日本の漫画 韓国版										1				
韓国事情(クイ ズ等)		1	2							5	○			
日韓文化比較			1							1				
ベトナム	実技 4	衣	民族衣装	1	1					4	○			
	解説 40		ベトナムの生活 スタイル		1					4	○			
スリランカ	実技 4	食	スリランカカレー							1				
	言語	シンハリ語								3	○			
	解説 3		スリランカ紹介		1					3	○			
モンゴル	実技 8	食	羊肉うどん							1				
		スーテチェ (ミルクティ)								2				
		衣	民族衣装		1					3	○			
	言語	モンゴル語 (キリル文字)								2				
	解説 21		モンゴル文化 クイズと解説							2				
ミャンマー	解説 1		ミャンマー事情					1		1				
異文化理解教室開催数				13	5	1	7	3	7	4	9	1	95回	

平成15年～平成23年までのNIU異文化理解研究室の報告文より筆者作成³⁾

～平成 23 年までほぼ満遍なく異文化理解教室に参加しているが、他の国からの留学生は、在学期間と活動期間が一致した数値となっている。人数が限られているなかであって、在学中は多くの異文化理解教室で活動してくれている。このことからわかるように、留学生の出身地が多岐に渡る方が多様な異文化理解教室を主催できるし、活動の幅が広がり深みを増すことができよう。本学に世界各地からの留学生が訪れることが望ましい。異文化理解教育の進展は、さまざまな事象がグローバル化していく地球上に住む人間にとっては、必須のできごとである。現在、「ゆとり教育」への反省から「総合的な時間」が減じられることになり、本研究室の活動も停滞してきた感があるが、佐世保市の南に位置する大学周辺の小学校や川棚町の小学校は、その必要性を認識して異文化理解教室が定着してきている。校長先生の国際交流や異世代交流への認識の強さによるところも大きいと思われる。

表 2 本学の留学生の出身地域と在籍状況 (翌年 3 月末現在⁴⁾)

	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
中国	16	57	126	183	214	235	206	190	204	216	250	209
香港			1	3	3	6	14	21	27	30	25	17
台湾		1	1	2	2	1	2	2	3	3	2	2
韓国	7	16	36	56	63	70	59	48	59	56	41	32
ベトナム			1	1	1	2	1	1	1			
スリランカ						1	2	2	2	1		
モンゴル			1	2	2	3	2	1				
ミャンマー											1	1
バングラディッシュ												1
イギリス						3	3				1	1
アメリカ										1	1	1
オーストラリア												1
トンガ			1	1								

長崎国際大学国際交流・留学生支援センターの資料より章潔さん作成

I-2 実施活動内容とガイドノートの活動内容

平成 15 年・16 年は、韓国人留学生に中学校での異文化理解教室を開催してもらったもので、表 1 にあるとおり、伝統的な食事のマナーや遊び・韓国語などを留学生が民族衣装を着て教え、中学生にも遊びやすい体操服を着てもらい体育館などで開催した。パワーポイントを使って解説するという手法はこの時から用いられている。また、クイズもグループに分かれて移動するなど、身体を使って理解を促そうとしていた。

平成 17 年度からは、小学校と高等学校での教室も開催されることとなった。

中国人留学生の教室では、「水餃子や団子作り」「正月飾り作り」「少林寺拳法」や「太極拳」「中国語」などの実技指導や、「自分の出身地域の紹介・観光地の紹介」や「中国の食文化」「伝統行事（新年）」などをパワーポイントに映しだして突出していて、数値が高くなっている。香港出身の留学生⁵⁾は、「香港人の生活スタイル」を紹介している回数がおおい。韓国人留学生は、実技では韓国の伝統的な「民族衣装」であるチマチョゴリやパジチョゴリを生徒たちに着せて、「クンジョル」などの伝統的な礼儀作法の実技指導をするなど、解説では、昨今の「韓流」の話や「韓国事情」をクイズ形式で展開するなどが高数値であった。

留学生数が少ない地域では、ベトナム人留学生は、ベトナムの伝統的な「民族衣装」であるアオザイを女子生徒に着せるなどの実技や、「ベトナムの生活スタイル」を解説したり、スリランカ人留学生は、「シンハリ語」の文字やあいさつを教えたり、スリランカという島国について解説したり、モンゴル人留学生は、モンゴルの伝統的な「民族衣装」である男女のゲールを着せて解説するなどが高数値となっている。

先に記したとおり、数値は各実施教室の主な活動内容をピックアップしてあるので、さまざまな事象・文化に少しずつ触れたり、これら以外の活動もあり得るし、回数も、数人の留学生で実施したものが1回としてあるものや、1人の留学生が数種の内容を解説しているなど、数値は大まかなものである。大まかなものではあるが、数次にわたって催されているということは、各留学生の意識上に登り易く、かつ自文化話者ならば解説しやすい自文化であるといえる。これらの活動内容は、これから先の異文化理解教室でも実施されやすい内容であることがわかる。活動内容が赤字で記されているものである。

表3 ガイドノートの活動内容表⁶⁾

地域	概要	作成者	内容	頁
香港	香港紹介	Ada&Anthony	1. 香港の基本的な概要 2. 衣環境 3. 食環境 4. 住環境 5. 行環境（乗り物）	スライド pp. 41-46 発表原稿 pp. 47-50
	食文化	Mochi&Cristal	1. 飲茶 2. 茶餐廳 3. おやつ 4. デザート	スライド pp. 51-52 発表原稿 pp. 52-55
	Culture	Scaret&Rosanna	1. 香港の基本的な概要 2. 食べ物 3. 乗り物 4. 観光地	スライド pp. 56-60 発表原稿 pp. 61-64
	Best2	林峻声 Sam	1. 日本のイメージ BEST2 2. 香港人がよく聞かれる問題 3. 香港の豆知識	スライド pp. 65-70
	おやつ	Betty&Anthony	香港のおやつ	スライド pp. 71-72
韓国	民族遊び	崔昌煥	シルムからジェギまで民族遊び	スライド pp. 73-75
	韓国の最近	キムイエナ&チェスルア	映画・ドラマ・音楽	スライド pp. 76-78

	文化	キムイエナ&チェスルア	正月・遊び・食べ物・あいさつ	スライド pp. 79-80
中国	水餃子	王美潔	中国各地の珍味・水餃子の作り方	スライド pp. 81-83
	新年	叶清英・林向国	新年行事いろいろ	スライド pp. 84-86
	饅頭	?	饅頭のいろいろ	スライド p. 87
	正月行事	呉玉梅	正月飾りいろいろ	スライド p. 88
	お正月	?	伝統的な正月行事	スライド pp. 89-90

『留学生と日本社会の研究-異文化理解教室をめぐって- (平成 21 年度)』より筆者作成

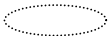
表 1a と表 1b 中で、 で囲まれているところは、その活動が得意な留学生が在籍していて、異文化理解教室の活動に参加してくれたから実施できた活動である。それら特技を持つ留学生の存在の有無に比べれば、赤字の活動内容は、ガイドがありさえすれば誰にでも実施できる内容となろう。では、ガイドノートがどれだけ整理されているかを見てみよう。平成 21 年度に掲載したガイドノートは下記の活動内容となっている。

表 1a と表 1b の赤字の活動内容と表 3 のガイドノートを比べると、表 1 で一番数値が高い「香港人の生活スタイル」については、香港出身の留学生によるガイドは掲載されていて、次代の留学生へ引き継がれていくことができるしくみができている。これは、香港城市学院から毎年本学に 3 年編入してくる 10 名内外の留学生が、編入前に科目等履修生時代から異文化理解教室の活動に参加してくるなかで育まれた良き伝統である。

中国人留学生では、「(水) 餃子作り」や「新年」についてのガイドはできているが、「正月飾り」「中国食文化」などがガイド化されていない。「中国語」や「地域紹介 (出身地・観光地)」なども、基本的なガイドがあれば留学生各位が各々付け加えることができよう。韓国人留学生では、「伝統的な遊び」や「韓流」のガイドがあるので、クンジョルを含んだ民族衣装ガイドができればいいだろう。

第 3 期にようやく次代の留学生に提示できた基礎的なガイドノートは、初めて異文化理解教室の活動に参加する留学生用のものである。異文化理解教室に参加した先輩留学生が自文化をどのように消化して、日本人生徒に提示したのかがわかるので、有効に活用すれば、それなりの価値は出てくるに違いない。上記のように、実施した活動内容のすべてがガイド化されるためには、第 4 期にむけてガイドノートの作成に励む必要があるだろう。

II これからのコアメンバーの役割

さきに、ダンカン・キャメロンの「テンプル」と「フォーラム」についての提唱に触れたが、吉田は、キャメロンが「ミュージアムのありかた」についての区別を提示しただけであるのに対し、「ミュージアムの将来のありかた」を語っている⁷⁾。

すなわち、「テンプルとしてのミュージアム」は、「人びとによく知られた『名宝』『至宝』を拝みに行く場所」であるから、「そこへ行く人びとは、そこに何があるかをあらかじめ知

っている」ことになり、「そこには新しい発見はあまり期待できない」。それは「既成の価値観が強化される」だけであるという。そして、「フォーラムとしてのミュージアム」は、『センター』ではなく、むしろ『インターセクション』とでもいった『情報の十字路口』、あるいは結節点とでもいうべきもので、「双方向的な対話性が必須のものとして要求される」といっている。

とりわけ、「ワークショップやギャラリー・トークのかたちで、展示する側とそれを見る側の『対話の』チャンネルが開かれることが重要で」、「日本国内に少数民族を含め、世界のさまざまな民族の出身者で日本語にたけた人びと」が暮らしていて、「協力を仰げば、日本語を介した『異文化』との『対話』も決して不可能」ではないと述べている。

さて、NIU 異文化理解教室でなされる「対話」のエッセンスはなんだろうか。当面考えられることは、教室に集うものは「日本人生徒」と主には「アジアからの留学生」であるということである。衆知のごとく、日本は古くは、世界4大文明中の中国文明の周辺地域として漢字を取り入れ、発達していた中国文明の摂取に努めてきた。日本文化の基盤に中国文明が泰然として存在する。また、韓国・ベトナムは、中国文明が波及した地であり、漢字文化圏として日本との類似点が多く存在する。

特に明治期以後、西洋文明を多くとり入れてきた日本は150年のあいだに、まるで日本が西洋文明の周辺地域に位置するように思考し続けてきた。中国・韓国・ベトナム等の日本周辺国にたいして、いつのまにか西洋の視点で眺めているところがありそうである。西洋が作りだした「異文化」観を受け継いで、日本周辺国に対しては、

15世紀前、日本が国の基を中国に求め諸制度を発展させてきたことを思えば、「アジアからの留学生」が背負ってきた文化は、祖先と祖先を同じくしている文化であることに気づくことがおおい。NIU 異文化理解教室を「フォーラム」と位置づけるばあい、全く異なった点ではなく、似ているが異なっているという差異への気づきが問われ、その差異がなぜ生じているのか、なぜその差異が温存されているのかが、議論の対象になっていく。これが、NIU 異文化理解教室でなされる「対話」のエッセンスではないだろうか。

美術館や博物館にあるような「至宝」が、異文化理解教室の目玉ではないだけに、親しみのもてる日常の営みの違いが、「日本語にたけた留学生」の協力によって「フォーラム」になっていくのである。サポーターとしてのNIU 異文化理解研究室のコアメンバーは、「議論のきっかけ」に関与すべきである。「きっかけ作り」は、「差異」に気づいたものの役割だからである。

いずれにしろ、「自己」と「他者」がかかわる、とくに異文化接触においては、同じときと空間を共有する「対話」によって、お互いがわずかながらでも変化する点に存在意義がある。だから、わたしたちはできるだけ頻繁にNIU 異文化理解教室を開催し、留学生にも日本人生徒にもものびのびと活動させることが必要である。「議論」が始まればコアメンバーの口出しは最小限にすべきであろう。

おわりに

本論稿で言及できたことは、NIU 異文化理解研究室のコアメンバーのサポーターとしての役割の一端であった。本来、「留学生の日本社会」について言及しなければならなかったのだが、小学生・高校生・学校関係者・留学生が居住する地域の人々・アルバイト先の関係者などにインタビューできず、本稿で取り上げることができなかった。言語の背景にある「思考」「行動」の差異による異文化接触の問題が、留学生を取り巻く日常生活のさまざまな場面で表出されているであろう。

留学生は日本語を外国語として学んで大学に席を置いている。出身地域と同じであると思われるコミュニケーションの場面であれば、母語と同じ「ことば」を発すれば、それで、コミュニケーションがうまくいくと通常は思われるのだが、そうとも限らない。外国語を理解し、それを文字通り発音できたとしても、学習言語の話し手の意図とネイティブの聞き手の理解が一致するとは限らないのが、異文化接触だからである。それは、言語と文化の異なりに発するばあいがおおいだろう。

留学生の異文化接触の思いと留学生の周りにいる人々の思いに寄り添うことによって、双方向からの異文化理解研究を続けていきたい。

注

- 1) NIU 異文化理解研究室（通称イブケン）は、平成 16 年度国際観光学科共同研究「佐世保地域の異文化理解教育を支援するプログラムの開発」の構成員である田淵幸親・下島康史・中野が、平成 17 年 3 月 17 日に「『NIU 異文化理解研究室（通称イブケン）』たちあげのための企画会議」を開き、翌年度（平成 17 年度）佐藤大祐・城前奈美を構成員に加え、設置案・パンフレット等を考案・作成し、平成 17 年度第 2 回国際観光学科会議にて、「NIU 異文化理解研究室（通称イブケン）」の設置が承認された。異文化理解教材は平成 15 年度より順次収集を行っている。詳細については、平成 18 年 3 月に出版された『佐世保地域の異文化理解教育を支援するプログラムの開発』（NIU 異文化理解研究室）の経過報告 pp. 4-7. 参照のこと。
- 2) 吉田憲司『文化の「発見」』pp. 207-208. pp. 216-217.
キャメロンは、「抵抗や対決、実験や革新などはすべてフォーラムにのみ可能なものであり、テンプルには期待すべくもない」（Cameron1972:199）と述べているという。
- 3) 表 1a と表 1b の国名については、通称標記としている。
- 4) 平成 23 年度の数値は、平成 22 年 9 月 1 日現在のものである。また、この数値は卒業生の数値なので、退学や除籍になった学生はカウントされていない。
- 5) 香港は 1997 年 7 月 1 日にイギリスから中華 人民共和国に返還されているが、155 年間の長きにわたる植民地の歴史は香港の文化に色濃く反映されている。その故に、香港出身の留学生による異文化理解教室は、中国大陸出身の留学生とは異なる文化として実施されている。
- 6) 表掲載の順は、pp. 41-90 のイブケン・ガイドノートの掲載順である。

7) 同掲書 pp. 222-226.

参考文献

- 1) 『佐世保地域の異文化理解教育を支援するプログラムの開発』平成18年3月、異文化理解研究室。
- 2) 『異文化理解教育を支援する支援するプログラムの開発（平成18年度）』平成19年3月、異文化理解研究室。
- 3) 『異文化理解教育を支援する支援するプログラムの開発（平成19年度）』平成20年3月、異文化理解研究室。
- 4) 『異文化理解教育を支援する支援するプログラムの開発（平成20年度）』平成21年3月、異文化理解研究室。
- 5) 『留学生と日本社会の研究-異文化理解教室をめぐって-（平成21年度）』平成22年3月、異文化理解研究室。
- 6) 『留学生と日本社会の研究-異文化理解教室をめぐって-（平成22年度）』平成23年3月、異文化理解研究室。
- 7) 吉田憲司『文化の「発見」』1999. 岩波新書。

異文化の理解と異文化を持つ人たちへの共感と

滝 知則

1. はじめに
2. 佐世保地区で文化交流を行うことの意義
 - (1) グローカルの時代
 - (2) 「他者」への恐怖と異文化理解
3. 佐世保地区の小学生と本学の留学生が経験した変化
4. おわりに

1. はじめに

この論考では、平成 23 年度の NIU 異文化理解教室（イブケン）を通じ佐世保地区の留学生と日本社会の関係に生じた変化を示したうえで、その変化が国際交流の観点からどう評価できるかを検討する。この検討には、筆者が参加した授業での観察結果を参考にする。次の第 2 章では、今日の佐世保地区において文化交流を行うことの意義を考察する。そして第 3 章で、今年度のイブケンで起きていたことの意義を考える。

2. 佐世保地区で文化交流を行うことの意義

(1) グローカルの時代

世界のグローバル化が進行しはじめてから数十年が経つと言われるが、異文化を持つ外国の人たちと実際に交流できるのが貴重な機会であることは、今日も変わらない。20 世紀後半の世界において国際的な人の移動が盛んになったのは 1970 年代以降である(毛利・森川編 2006: 218)。冷戦の終了も、国際的な人の移動の機会を増やした。アジアについて述べるならば、まず 1980 年代以降、日本と東南アジアの交流が増加した。そして 1990 年代半ば以降、日本と中国・韓国の 3 か国間の交流も増加している(毛利・森川編 2006: 214-5)。

とはいえ世界全体でみると、外国で暮らす人たちよりも、自分が生まれ育った場所で活動する人たちの数の方が圧倒的に多いのは、当然のことである。21 世紀初めの世界人口に占める移民の割合は、約 2.9% (約 1 億 9,000 万人) である(キーリー 2010: 12)。

国際的な人の交流が増えている一方、圧倒的多数は地元出身の人たちであるという事情は、今日の日本にも、そして長崎県にもあてはまる。平成 22 年末の時点で日本国内に暮らす外国籍の人たちの数は 213.4 万人であり、日本の総人口に対する比率は 1.67% である。長崎県内に在住する外国人は 7.7 千人で、県の総人口の 0.5% である。

日本にいる外国人の中でも、当研究で筆者が関心を持つのは、留学生である。日本国内

の外国人留学生の総数は 20.2 万人であり、そのうち中国の留學生が 66.7%、韓国・朝鮮の留學生が 13.4%を占める。長崎県内の留學生は 1.8 千人である。

また外国からの観光客は、日本に滞在する期間が短いものの、日本を訪れる外国人の 96%を占める（平成 23 年の新規入国者中の比率）。日本国内ならびに長崎県内の経済に与える影響の観点から、国際観光客への対応への関心は高い。平成 22 年に日本を訪れた国際観光客 568 万人のうち、人数で上位の国・地域は、韓国、中国ならびに米国である。同じ年に長崎県を訪れた外国人観光客は 32 万人で、そのうち 27 万人は韓国、中国（台湾と香港を含む）、ならびに米国からの観光客である（上記のデータについては、当論考の末尾を参照されたい）。

現在学校に通っている人たちと、その数世代前の人たちとを比較すると、自分が生まれた場所ないし国で生活し、学び、働く人たちがほとんどだという点は変わらない。しかし、自分たちの日常の生活の場で国際交流を行なえる機会は、増えている。従って、「グローバルに考え、ローカルに行動する」という意味での「グローカル」なものの見方と行動のしかたは、私たちが今日、佐世保地区ならびに長崎県北地区に暮らして国際交流をする際にも適切であり、かつ必要なことである。現在学校で学んでいる人たちが成長し、社会人として活躍する 21 世紀前半において、日本とアジアの国々との交流が、今後もさらに深まることが考えられる。同時に、米国との交流も、日本にとって重要である。それゆえ、国際交流の相手はアジアの国々の人々ならびに英語を話す人々（米国を含む）が多くなるであろう。

（２）「他者」への恐怖と異文化理解

異文化の「理解」は、異文化を持つものどうしが共存していくために大切であるとは、つとに繰り返し言われていることである。なぜそうなのかを、筆者なりに整理したい。

異文化交流において避けるべきことは、交流の相手ならびにその行動を「理解不能」ととらえてしまうことだと、筆者は考える。というのは、相手のことが分からないという思いは、その相手に対する恐怖感に変化することがあるからである。これは、異文化に接すると人間は必ず恐怖感を抱くということを述べているのではない。何らかのバイアスを相手に対して持っていることが、こうした恐怖感に手伝っている。「オリエンタリズム的まなざし」は、そのようなバイアスの一例である。とはいえ、「理解不能」ととらえることや恐怖感を抱くことに慎重でなくてはならない理由は、場合によってはその恐怖をとりのぞくための暴力の行使が、正当化されてしまうおそれがあるからである（土佐 2003: 304）（また、そのような実例は残念ながら存在する）。

異文化どうしの出会いが摩擦の要因になることがあるとの認識から出発すると、逆に、文化交流を摩擦を避けるための手段にする可能性が期待される。今日の国際関係の議論において、「異なる文化間、文明間の相互理解と信頼の涵養」は、国際的な紛争の予防にとって重要と考えられている（福島 2010: 202）。同様のことは、国内での異文化どうしの出会い

への対応についても言える。日本の社会に暮らす外国人が増加することに不安や恐怖感を持つ日本人がいる。このような人たちと外国人住民が交流し、お互いに親しめるようにしたり、外国人住民の実態を知ってもらったりすることが大切と言われる(福島 2010: 270-1)。このような不安、ならびにその不安を減らすための対応の必要性が存在するのは、日本に限らない。グローバルな社会(日本もそうである)で、国内での異文化間の緊張・対立の防止が求められる頻度は、上述の国際的な紛争の予防よりも多いかもしれない。

過去数十年の間に日本社会のグローバル化が進んだことに伴い、私たちが日常生活の場において異文化と交流をする機会は増加している。異文化を持つものどうしが交流するとき、文化は双方を結びつけることもあれば、対立させることもある。しかし、相手の文化の理解に努めるという意味での文化交流活動は、グローバルな文脈の中の地域社会において、摩擦を予防する効果があるはずである。さらに望むらくは、そうした経験をした人たちが将来、摩擦を予防する人材に育つ可能性も期待したい。これらのことを念頭においたとき、NIU 異文化理解教室の場で行われた交流の意義には何があるのだろうか? 次の章では、このことを振り返りたい。

3. 佐世保地区の小学生と本学の留学生が経験した変化

今年度の NIU 異文化理解教室(イブケン)では、日本と中国の文化、ならびに日本と韓国の文化の出会いがあった。今日の日韓関係、日中関係は全般的には頻繁であり、かつ良好である。このような国際的な構造の下での交流であるから、先に述べたような「理解できないがための恐怖感」のおそれは非常に少ないとあってよいだろう。イブケンで摩擦が生じるかもしれないなどと、そもそも筆者も感じたことはない。交流がうまくいくことをごく自然のことだと考えることも可能であろうが、筆者としては、現在の日本がおかれている国際関係の現状も反映していることを確認しておきたい。

上記のような構造を確認したうえで、筆者が今年度携わった各小学校での交流の中で起きていたことは何かを、時系列順に振り返りたい。以下に示すことは、あくまで筆者が気づいた順に記述するということであり、ある学校で観察したことは他の学校でも起きていたことを、あらかじめ確認しておきたい。

広田小では第1に、外国語でのコミュニケーションに対する自信をつけることができた人たちがいた。第2に留学生たちは、広田地区の文化ならびに日本文化の理解を深めることができた。第3には、①日本の文化を理解する外国人もいるとの気づき、②異なる文化を持つ人たちと同じ地域社会で生活しているとの実感、③一緒に調理をしたり、食べたりすることを通じ、留学生との一体感を高めたこと、④お互いの文化を比べ、違う部分のあることを知ると同時に、ものごとを感じる気持ちについては、共通するものがあると分かったことである。

川棚小での交流で起きていたことの第一は、①自分がそれまで知らなかった文化要素を

新しく知ったり、すでに知っていると思ったある文化要素の認識を見直し深めること、そして②自分の文化と外国の文化の類似点と共通点に着目した比較を行うことである。第二は、地域社会の一員としての自己アイデンティティの（再）確認（特に川棚小6年生にとって）、ならびに国際社会の一員としての自己アイデンティティの（再）確認（川棚小6年生と本学の留学生の双方にとって）である。自己アイデンティティの（再）確認は、自己と他者とのつながりの確認でもある。このような確認ができた人は、その後の行動の範囲がひろがるのではあるまいか。

江上小では第一に、自文化の見直しが行われていた。第二に共通のアイデンティティの形成と、名前呼びかける「顔の見える」関係の形成があった。名前呼びかけることは、「理解不能で怖い」とは正反対の関係づくりの実践である。「留学生のみなさん」ではなく、自分の名前と呼ばれることを、留学生たちは確かに喜んでいて、小佐世保小では、自分たちが調べた「日本の文化」のみに止まらず、恐らくは意識しないうちに、日本の学校の文化を留学生に伝えた。

以上に述べた、佐世保地区の小学生と本学の留学生が経験した変化を整理すると、コミュニケーション能力に関わること、異文化の文化要素を知ること、そして自分の文化と異文化の間に共通することの気づき、の3点にまとめることができそうである。箇条書きにすれば次の通りである。

- (1) コミュニケーション能力に関わること
 - a. 外国語でのコミュニケーションへの（不安と）自信
- (2) 異文化の文化要素を知ること
 - b. 自文化の（再）認識ならびに異文化との遭遇
 - c. 自他の文化の類似点への気づき
 - d. 日本の学校の文化（生徒が発言する、初対面の人と話す、給食など）の発信
- (3) 自分の文化と異文化の間に共通することの気づき
 - e. 非言語コミュニケーション面での共感。名前と呼ぶ関係（「留学生」や「外国人」といったラベルではなく、一人一人の現実の人間としての認識）や、一緒に笑ったり食事を摂ったりするとうれしい、楽しいなど
 - f. 異文化を持つ人たちとの、地域社会における共生についての気づき

これを要するに、イブケンの中では、佐世保の小学生たちと本学の留学生たちが、お互いの文化の違いを理解する一方、双方に共通する普遍的なものの存在に気づくこともできている。授業でのプレゼンが前者の役割を、遊びや食事を共にすることが後者の役割を果たしている。この意味で、グローバルな時代に求められるべき国際交流が実現していると言える。異文化を持つ人と楽しく交流したという記憶は、第2章で述べた偏見と恐怖感の正反対の効果をもたらすことが期待される。

4. おわりに

当論考の目的は、佐世保地区の小学生と本学の留学生がイブケンで経験したことの意義を考察することであった。本論の前半では、グローバルの時代には非大都市部でも国際交流が可能であること、そしてこのような交流にとっての一つのポイントが他者を「理解不能」ととらえたり恐怖感を抱いたりしてしまうのを避けることである、と述べた。後半では、イブケンでの実際の経験を振り返った。そこで起きていたのはコミュニケーション能力の向上に関わること、異文化の文化要素の知識の習得、ならびに自他の文化の間の共通性の気づきであった。異文化を持つ他者を頭と心で理解し、恐怖感ではなく共感を覚えられる関係が、いずれの授業においても作られていたことが分かった。

データ

(1) 日本国内の外国人登録者数（平成 22(2010)年末、単位：万人）^{注)}

総数 (比率)	213.4	中国	68.7 (32%)	韓国・ 朝鮮	56.6 (26.5%)	ブラジル	23.1 (10.8%)	米国	5.1 (2.4%)
------------	-------	----	---------------	-----------	-----------------	------	-----------------	----	---------------

出典： 法務省（2011）

(2) 日本国内の外国人登録者数（留学）（平成 22(2010)年末、単位：万人）

総数 (比率)	20.2	中国	13.4 (66.7%)	韓国・朝鮮	2.7 (13.4%)	米国	0.3 (1.3%)
------------	------	----	-----------------	-------	----------------	----	---------------

出典： 法務省（2011）

(3) 長崎県内の外国人登録者数(2010年、単位：人)

総数	7,698	中国	4,037	韓国・朝鮮	1,291	米国	462
----	-------	----	-------	-------	-------	----	-----

出典： 独立行政法人統計センター（2011）

(4) 長崎県内の外国人登録者（留学）数(2010年、単位：人)

総数	1,810	中国	1,428	韓国・朝鮮	156
----	-------	----	-------	-------	-----

出典： 独立行政法人統計センター（2011）

(5) 観光目的の新規入国者（平成 22(2010)年）

合計 (比率)	568	韓国	181 (31.8%)	中国 (台湾)	110 (19.5%)	中国	75 (13.2%)	中国 (香港)	44 (7.8%)	米国	31 (5.5%)
------------	-----	----	----------------	------------	----------------	----	---------------	------------	--------------	----	--------------

出典： 独立行政法人統計センター（2011）、法務省（2011）

(6) 長崎県を訪れた外国人観光客（平成 22(2010)年の宿泊数、単位：万人）

合計	31.9	韓国	17.6	中国 (台湾)	6.4	中国	1.5	米国	1.5	中国 (香港)	0.4
----	------	----	------	------------	-----	----	-----	----	-----	------------	-----

出典： 長崎県観光振興課（2011）

注) 平成 23 年末の外国人登録者数は 207.8 万人で、前年に比べて 5.7 万人の減少であった。この減少の国別内訳は、中国が 1.2 万人、韓国が 2.1 万人、ブラジルが 2.1 万人、米国が 0.1 万人であった。この減少の背景には、東日本大震災の影響があると考えられる(法務省入国管理局 (2012))。

参考文献

キーリー, ブライアン (2010) よくわかる国際移民—グローバル化の人的側面. 明石書店.

土佐弘之 (2003) 安全保障という逆説. 青土社.

福島安紀子 (2010) 人間の安全保障—グローバル化する多様な脅威と政策フレームワーク. 千倉書房.

毛利和子・森川裕二編 (2006) 図説 ネットワーク解析 (東アジア共同体の構築 4). 岩波書店.

独立行政法人統計センター (2011)

都道府県別国籍 (出身地) 別外国人登録者

都道府県別在留資格 (在留目的) 別外国人登録者 (総数)

都道府県別年齢・男女別外国人登録者 (その 1 中国)

都道府県別年齢・男女別外国人登録者 (その 2 韓国・朝鮮)

<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001074828> (2012 年 3 月 7 日取得)

長崎県観光振興課 (2011) 平成 22 年長崎県観光統計.

<http://www.nagasaki-tabinet.com/public/statistics/data/01/h22/text.pdf>

(2012 年 3 月 7 日取得)

長崎県統計課人口生活統計班 (2011) 世帯数・人口の推移.

http://www.pref.nagasaki.jp/toukeidb/jyouhou_koukai/nenji_frame.php?prm_keisai_no=27&prm_check=

(2012 年 3 月 8 日取得)

法務省 (2011) 平成 23 年版「出入国管理」

http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri06_00017.html

(2012 年 3 月 7 日取得)

法務省入国管理局 (2012) 「平成 23 年末現在における外国人登録者数について (速報値)」

<http://www.moj.go.jp/content/000094842.pdf> (2012 年 3 月 8 日取得)

異文化理解教室の出前授業からみる留学生の異文化理解

谷口 佳菜子

目次

1. はじめに
2. 異文化理解教室の活動概要
3. 留学生の異文化理解
4. 異文化理解教室の活動の課題
5. 考察
6. おわりに

1. はじめに

2009年5月1日現在において、留学ビザを取得し、日本の大学や大学院、短期大学、高等専門学校及び専修学校(専門課程)において教育を受ける留学生の総数は10万人を超え、日本の社会において留学生の存在は以前よりも大きくなっている。

文部科学省により学校機関において国際理解教育の推進が図られる中、留学生は地域に住む身近な外国人として、異文化理解に大きな役割を果たす可能性がある。大学に在籍する留学生と小学校・中学校・高等学校の間で行われる異文化理解の交流はその一例であり、そうした交流の実践的な報告(植木・高橋2010;大島・田村1998;御館2008;花見・橋本2001等)や交流の教育効果を実証的に明らかにしようとする研究(金城2010)が行われている。

本研究では、2009年度から2011年度までに実施された長崎国際大学の異文化理解教室による留学生の出前授業を通じて、留学生が日本人の小学生や高校生と交流を行うことによってどのように異文化や自文化を理解するのか、また、出前授業がどう留学生の成長につながっていくのかについてみていきたい。本研究の目的は、留学生が異文化理解教室で体験した交流から学んだこと、感じたこと、どのような異文化交流を望んでいるのかについて明らかにするとともに、異文化理解教室の課題を考察することとする。本研究は、筆者が主として関わった2009年度から2011年度までの活動における観察と、留学生の口頭による感想や提出された感想文を中心にまとめ、検討していく。

2. 異文化理解教室の活動概要

ここでは、筆者が実際に主として関わった異文化理解教室の活動について概観しておきたい。すべての異文化理解教室の出前授業は出前先の学校からの要望に合わせたものとな

っており、出前先の担当教員との電話やメールでの打ち合わせを重ねて実施に臨んだ。留学生とは事前に打ち合わせを行い、留学生が事前に準備する必要があるものについては、筆者の前で留学生が数回の練習を行い本番の出前授業に備えた。

出前先の学校は、小学校 4 校、高等学校 1 校であった。主な異文化理解教室の出前授業の内容は、大きく 3 つに分けられる (表 1)。1 つは実施回数が 6 回である異文化体験である。この中には水餃子作りや相撲体験が入る。2 番目に多く実施されたのは小学生による発表の視聴で、これは小学生が学んだことや外国人 (留学生) に向けて伝えたいこと (例えば日本の文化など) を発表し、留学生から意見や質問をもらうことを主としたものである。もう 1 つは、留学生による発表である。発表内容は、留学生によって異なっており、自国や自文化の紹介、少林寺拳法やダンスの披露などがあった。

出前授業に参加した留学生は、延べ人数で中国本土出身の留学生 23 名、香港出身の留学生 5 名、韓国出身の留学生 14 名である。

表 1 異文化理解教室の出前授業 (2009 年度 - 2011 年度) 注)

主な交流内容	実施回数	留学生数 (延べ人数)
①異文化体験 (餃子作りや相撲体験など)	6	22
②小学生による発表の視聴	3	9
③留学生による発表	2	11
合 計	11	42

3. 留学生の異文化理解

次に、出前授業の観察 (授業前後を含む) と留学生の感想から留学生が学んだこと、感じたことについて、出前授業の内容別に検討し、留学生が体験した以外に望む異文化交流についてみていく。

(1) 留学生が学んだこと、感じたこと

①異文化体験

ここで挙げた異文化体験とは、おおまかに分けて 2 つある。1 つは、食文化の体験で、もう 1 つは鍛錬遠足と相撲大会である。食文化の体験は、自国の料理と一緒に作り、その過程において自国の食文化の説明を行ったり、小学生に日本の食文化との比較を促す一方、留学生は日本の給食を体験した。

留学生の中には、普段あまり料理をしない者もいたが、自国の食文化を紹介するため、練習を何度も行った。紹介する料理を成功させたいという思いで、作り方を料理の上手な友人に教えてもらいながら練習したという。この留学生にとっては、食文化を紹介する出前授業が料理を学ぶきっかけにもなったようだ。

料理の作り方を小学生に教えていくときには、留学生はまず自分が作っているところを見せ、次に小学生に実践してもらい、できているか確認しながら進めるという方法をとった。多くの留学生がときおり小学生と、普段餃子は食べるか、辛いものは食べられるか、何が好きかなどの会話を行う様子がみられた。何人かの留学生は、小学生と会話を弾ませることができない様子であったが、優しい態度で作り方を教えたり、小学生を褒めたりすることで交流しようと努力する姿があった。

食文化を通じた出前授業で、留学生の中には自国の教育と比較する者もいた。ある留学生は、自国では小学生と留学生が交流するような活動はなく、自国の子供の自立は日本の子供の自立よりも低い原因の一つであると感じたと述べている。

もう1つの異文化体験についてみてみよう。留学生は、小学生の年中行事の1つに参加し、鍛錬遠足や相撲を体験した。鍛錬遠足とは、小学校から相撲大会が行われる場所まで、約1時間歩いていくものである。相撲大会では、小学生だけでなく相撲大会を主催している地域の方々との交流も行うことができた。

相撲についてみると、日本の相撲は知っているが実際に相撲が行われている様子を見たのが初めてであるという留学生が多く、「感動した」という感想が多く述べられている。加えて、小学生が相撲をする様子を見たり一緒に取り組みを行うことによって、留学生には、「一生懸命にすること」、「何度でも立ち向うこと」など小学生の態度や姿勢が強く印象に残ったようだ。日本の小学生の態度や姿勢が自国の小学生と比べて素晴らしいという点も感想として述べられている。また、交流中には準備や食事でお世話になった地域の方々に感謝する姿もみられ、感想文にも感謝の言葉がみられた。

異文化体験は、留学生と小学生の双方が楽しみながら参加できる交流となった。料理を作るなど小学生と同じ目標を達成しようとすることや体を使って出前授業を行うことは、留学生と小学生の距離を縮めやすく、交流しやすいように感じられた。

②小学生による発表の視聴

小学生の発表は、通常約4~6名で調べたことを発表すると調べ学習の発表と1年の学習の成果を発表する学習発表会の2つがある。調べ学習の発表は、主に日本や日本文化がテーマとなっており、各ブースに分かれてグループごとの発表がなされた。留学生は各ブースで行われた発表をそれぞれ分かれて視聴した。小学生の発表時間は約10分である。小学生の発表は、基本的には模造紙を利用して説明するが、グループによっては実物（茶道具や海産物、調味料など）を見せたり、実演（着付け、茶道など）をするなどさまざまであった。学習発表会は、小学生が1年間を通して学んだことの発表を見学するものであった。ここでの交流は挨拶程度のものであった。

小学生の発表を視聴して留学生が感じたことについてみてみると、日本の小学生の素直さや能力の高さ、思っていた日本の小学生像との違いに驚いたということである。どの留学生からも日本の小学生のプレゼンテーションのスキルが高いことが挙げられた。小学生

による発表を視聴した留学生全員が、小学生が資料を調べたり、アンケートを行ったりして調査をし、研究した結果をまとめて発表しているということに驚いたと話している。小学生の発表によって初めて知ったことがあったことや、聴き取りやすくわかりやすかったといったこと、質問についてもしっかり受け答えできたことや、自国についてはどうか聞いてくれたことも印象深かったようである。他に、自分が小学生のときを回顧する感想もみられたが、自分のときよりも今回視聴した小学生の発表の方が優れており、自国の小学生よりも恥ずかしがっていないと述べていた。同じ授業内で小学生の発表の視聴と留学生の発表が行われたときの感想からは、小学生の発表を視聴して自分の発表の準備不足や勉強不足、日本語の拙さを感じたということも述べられていた。

小学生の発表を視聴することは、留学生が自国の教育について、また自国の小学生について考える機会にもなったようだ。例えば、日本の社会には個性を強調しない、考えずに命令を聞くというイメージがあったが、日本の小学生からは感じられなかったということ、自国の小学生には必要以上の授業が行われており、「本来、子供ににあたえるべきである自由な発想や、他人に対するコミュニケーション能力が乏しく、授業の負担が精一杯にされ、社会や生活に必要である理解が不足していると思う」ということが述べられていた。

小学生の発表を視聴することは、日本の小学生を知る一つの機会であり、また留学生にとっては小学生の発表で新しいことを知る機会ともなり、よい経験となったようだ。その一方で、この出前授業に参加した留学生からは、遊んだり体を動かすようなことをしたいといった意見もみられた。

③留学生による発表

留学生による発表は、自国や自文化などについてパワーポイントを用いて説明するもの、少林寺拳法やダンスなど特技を披露するものであり、それらのほとんどが約20～30分で行われた。

発表前、留学生に出前授業の内容が自国や自文化に関する発表であることを伝えると、留学生は日本語での日常会話に支障がなかったとしても自分の日本語が相手に通じるかどうかを非常に心配する者が多くみられた。特に初めて出前授業に参加する留学生は不安と緊張が大きかった。発表の準備段階に入って、自国を紹介できるだけの知識がないことを認識した留学生や、パワーポイントを利用した発表の経験がなく不安を覚える留学生もいた。しかし、以前に他の留学生が発表したことのあるテーマや内容を伝えたり、発表者となる留学生自身の関心などを聞き出したりすると、自分ができる発表のテーマや内容を絞り込み、前向きに準備をする様子が見られた。パワーポイントについては自ら学んで資料作りを行い、発表前には筆者のもとに練習に何度も訪れた。

発表後、留学生からは、もっと準備した方がよかった、小学生の発表と比べると恥ずかしい、発表のスキルを向上する必要がある、緊張したといった感想が述べられたが、日本語で発表し、それが相手に伝わったことで自信につながった様子であった。

高校生に対しては、「高校生の韓国に対するあつい関心、勉強で覚えた韓国を伝えてみようとすると、新鮮な衝撃をうけました」と言った感想があった。その一方で、「・・・(略)皆若いし韓国と言えば食べ物か芸能人だと思ってこれを中心にして説明した。でも、本当にみんなそれにしか興味がないようで他に韓国の文化をもいろいろ知って欲しいと思った。これからの韓国人留学生の宿題は韓国の色んな文化をより広く、より多く知らせることだと感じた」とこれからの課題について述べたり、「母国の文化を留学先に伝えることは留学生達の実責任であると思う」といった考えを述べる留学生もおり、留学生自身が自文化を伝える担い手であることを実感している。

(2) 留学生が望む異文化交流

次に、留学生が従来の異文化交流活動以外にどのような異文化交流を望んでいるかをみてみたい。中野(2009:10-15)は、留学生に行ったアンケートの中で「あなたの異文研活動で何が不足していたと思いますか。」という質問と「これから異文研で何をしたいですか。何でも自由に書いてください。」という質問をしている。このアンケート結果についてみると、留学生からは、「こどもだけでなく若者と交流したい」、「他の大学の大学生と交流したい」、「定期的・固定的な交流会があったらいいと思う」、「特技をする」といった意見があった。

筆者が留学生から聞いた、あるいは感想文として記述されていたことから留学生が望む異文化交流についてみてみよう。筆者が関わった異文化理解教室では、2回の高等学校での出前授業があったが、それ以外は小学校で行われたものであった。留学生の感想をみると、「子供との交流に限らない、大人との交流にも望んでいます」や「他の大学の韓国に興味がある人たちとか佐世保市内に韓国に興味がある人たちと交流した方が多分お互いにもっと文化交流ができると思います!」といった意見があった。大人との交流を望む留学生は、小学生だけでなく、小学校の教職員の方々との会話を楽しんでいる様子であった。

交流内容でみると、「もっと小学生たちに韓国語や文化などについて教えてあげたいです。今度は韓国や中国の面白い映画やアニメなどをみせたいと思いました」といった感想もあった。この感想を述べた留学生は、翌年度、高等学校に出前授業を行った際に、韓国の芸能人やドラマ、映画などを説明しており、自分が希望する内容を反映させていた。

その他の希望についてみると、「小学生たちのゲームをしたりしてもっと親しくなりたいです」、「もっと一緒に楽しめる各国の伝統遊びとか子供のころした遊びなど体を動かせる活動をしてみたい」というような小学生と遊びを通して交流することを望む声も多くあった。

以上のことから、留学生は小学生に限らず、交流相手を求めていること、また交流内容も自分の興味に沿ったものの紹介や、遊びや体を使った活動を希望していることがわかる。

また、「もっとほかの友達を誘っていききたい」といった感想もあった。一度出前授業を経験した留学生についてみると、他の留学生を誘い、出前授業の内容や準備に必要なことに

について教示するなど新たなメンバーを育成しており、経験者である留学生が出前授業を発展させる可能性があると考えられる。

4. 異文化理解教室の活動の課題

次に異文化理解教室の活動について検討しよう。1つは、複数回交流を行う場合であるが、留学生と引率教員の授業の関係により、留学生のメンバーが必ずしも同じではないということである。できるだけ同じ留学生と交流を行うことが望ましいと考えられるため、複数回行う場合には、前もって日程を固定しておくなどうまく調整することが重要となる。

もう1つは、留学生が望む異文化交流が必ずしも出前先の学校との要望と適合するとは限らないことである。もちろん、出前先の学校の要望に合わせて進めていくのであるが、実際に参加するのは留学生であり、出前授業の経験者である留学生にとっては自分の経験を活かすためにも出前授業に積極的に参加していくことが望ましいからである。

留学生の希望として、小学生と遊びたいということがあったが、筆者が関わった出前授業以外では、日本・中国・韓国の遊びの紹介と実践が行われており、そのような出前授業が依頼されたときにその情報を留学生に提供することで対処することができると考えられる。

また、留学生が率先して活動内容を考えられるよう、留学生と出前先、コーディネーターとなる担当教員が話し合う場をつくることも一つの解決策であると考えられる。ある小学校では、留学生と出前先の教員、小学生を交えて次回の交流会について話す機会があった。留学生も一緒に内容を考え、出前先の質問や要望を直接聞き、そこでまとめたことが実際に次の出前授業に活かされた。このように、出前授業の前に出前先と意見交換する場が設けられれば、今以上に留学生の積極的な参加を促進することができるかもしれない。

5. 考察

留学生は、出前授業を通して、自国との違いの一つとして小学生の印象や教育について考える場面が多くあった。どの交流内容であったとしても、自分が小学生の頃に授業で外国人との交流があまりなかったという点に加え、留学生と交流する機会を設けているのは日本の教育の良い点であるということであった。このような異文化理解の活動が留学生にとっても日本の社会を知る上でよい機会であるということが感想として述べられている。さらに、小学生の印象として、「素直」、「活気」、「気配り」、「協調力(性)」を挙げており、活動前に持っていた日本の小学生のイメージと違うと述べる留学生もいた。自国の小学生との比較している留学生がこれまでにどれほど自国の小学生との交流があるかわからないため容易に判断することはできないが、彼らの感想からは日本の小学生の印象が良い、あるいは良くなったことがうかがえる。

異文化体験では、食文化の紹介や相撲体験を通じて留学生が楽しみながら交流ができており、自国や自文化についての発表よりリラックスして取り組める出前授業となった。また、留学生が望む交流からも、小学生と一緒に楽しめるような異文化体験を好む傾向があることがわかる。

発表についてみると、留学生は小学生による発表の視聴から新しいことを知ったり小学生を知るきっかけとなった。留学生が行う発表では、自分が1つの発表を行うことによって自分の能力について知り、それを努力によって高めることができたように見える。自国についての知識を増やし理解を深めること、パワーポイントなどコンピュータのスキルを身につけること、人前で発表することなどである。また、自文化をもっと伝えなければならぬといった課題を見つけることもできた。

以上のことから、1回当たりの交流時間が長い場合や数回に渡って交流が行われる場合には、異文化体験と発表と組み合わせて行うことによって、留学生にとっても出前先の生徒にとっても、親密になることに加え知識を増やし、スキルを向上させるような学習効果をもった交流になると考えられる。

出前授業に参加した留学生にはもう一度参加したいと感想を述べる者が多く、一度出前授業を経験すると、他の留学生を誘い、出前授業の内容や準備に必要なことなどを教示していたことも注目すべき点である。このような留学生の行動は、異文化理解教室の活動を発展させていく上でも重要になると考えられる。

6. おわりに

本研究では、2009年度から2011年度まで実施された異文化理解教室による出前授業から留学生が学んだこと、感じたこと、留学生が望んでいる異文化交流、そして異文化理解教室の課題についてみてきた。出前授業の内容を異文化体験、小学生による発表の視聴、留学生による発表の3つに分けて考察すると、異文化体験は、小学生と親しくなれる交流であり、留学生も望むものであった。小学生による発表の視聴では、小学生が調査したことを知る、また日本の小学生や教育について考える機会となっていた。留学生による発表では、あらゆる点からの成長がみられるものであり、例えば、日本語に自信を持つ、自国について学ぶ、コンピュータのスキルを向上させる、発表で得た経験を違う機会に活かそうと考えたり、他の留学生に出前授業の発表の仕方について教えるといったことであった。このようなことから、複数回の交流を持ち、異文化体験と発表を組み合わせることが望ましいということが導き出された。

出前先に複数回の交流を提案することや、日程や出前授業に参加する留学生のメンバーをうまく調整すること、出前先の要望と留学生の望む内容を適合させながら有意義な出前授業として行うようにすることなどは今後の課題である。このような課題を解消する方策を考え実施しながら出前授業を充実させ、異文化理解の向上に寄与していきたい。

注) 実施回数には、高等学校(2回)を含む。ここでは日本人学生2名による協力は除いている。

参考文献

- 青木順子(1999)『異文化コミュニケーション教育―他者とのコミュニケーションを考える教育―』溪水社。
- 植木節子・高橋博代(2010)「国際理解教育のための自文化認識を育てる授業」『千葉大学教育学部研究紀要』58巻, 95-102頁。
- 大島まな・田村知子(1998)「留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究(その1)―大学周辺地域の小学校との国際交流活動を中心に―」『生涯学習研究センター紀要』6号, 59-80頁。
- 岡戸浩子(2002)『「グローバル化時代」の言語教育政策―「多様化」の試みとこれからの日本』くろしお出版。
- 御館久里恵(2008)「留学生と児童が共に学ぶ異文化理解教育の実践―小学校における留学生の『正統的周辺参加』」『鳥取大学生涯教育総合センター研究紀要』5号, 33-43頁。
- 金城尚美(2010)「小学生と留学生の交流活動による異文化理解教育の教育効果に関する一考察」『琉球大学留学生センター紀要』7号, 33-47頁。
- 佐藤郡衛(2001)『国際理解教育―多文化共生社会の学校づくり―』明石書店。
- 田村知子・大島まな(2002)「留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究(その2)―『総合的な学習の時間』で行う学習活動を中心に―」『生涯学習研究センター紀要』7号, 95-109頁。
- 多田孝志・櫻橋賢次編(1997)『小学校 ユニセフによる地球学習の手引き―新しい視点に立った国際理解教育』教育出版。
- 中野はるみ(2009)「異文化理解教室の役割―留学生と生徒にとって―」『異文化理解教育を支援するプログラムの開発―平成20年度―』NIU異文化理解研究室, 9-20頁。
- 花見慎子・橋本顕彦(2001)「小学校における国際理解教育と留学生交流」『見え大学留学生センター紀要』3巻, 25-40頁。
- NIU異文化理解教室(2009)『異文化理解教育を支援するプログラムの開発―平成20年度―』NIU異文化理解研究室。
- NIU異文化理解教室(2010)『留学生と日本社会の研究―異文化理解教室をめぐって―(平成21年度)』NIU異文化理解研究室。
- NIU異文化理解教室(2011)『留学生と日本社会の研究―異文化理解教室をめぐって―(平成22年度)』NIU異文化理解研究室。
- 総務省統計局刊行, 総務省統計研修所編集「日本の統計 2011」
文部科学省「小学校学習指導要領解説」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syokaisetsu/index.htm
(2012年2月20日取得)